

1. 研究主題

即興を前提とするやり取りができる力を育む英語授業の工夫
～目標設定リストに基づいた系統的な帯活動を通して～

2. 研究主題設定の理由

近年、急速なグローバル化の進展の中で、異文化理解や異文化コミュニケーションはますます重要になり、国際共通語である英語の能力の向上を目指す教育は、日本の将来にとって極めて重要であると言われている。東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020年はもとより、現在の中学生が社会で活躍する頃の日本は、多文化・多言語・多民族の人たちが協調する国際的な環境の中にあり、社会的・職業的な場面だけではなく、科学・芸術・文化・スポーツなどのさまざまな分野で、英語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えることが予想される。

このような社会情勢の変化を受けて、国の英語教育改革が急速に進み、2020年からは、小学校で外国語が教科となり、小学校5・6年で週2時間の授業が実施され、小学校3・4年では、週1時間の外国語活動が導入される。また、中学校では、語彙数や新出文法が増加され、高等学校では、大学入試改革に伴い、教育課程の見直しや多面的評価が推進されている。このように、グローバル社会を生き抜く人材に必要な外国語能力の育成を目指した取組が小・中・高・大学と一貫して行われることが求められている。

中学校新学習指導要領 第9節 外国語 (H.29.3 文部科学省)を見てみると、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能の中の「話すこと」が[やり取り]と[発表]に分けられ、5つの領域で構成されており、「話すこと」に課題と重要性を見出していると考えられる。また、第2章第9節第2、1目標の(3)「話すこと」[やり取り]のアでは、「関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする」が挙げられており、「即興で伝え合う」力の必要性が強く求められている。

そのような中、平成31年度全国学力・学習状況調査で、「話すこと」の調査が、中学3年生全員を対象で実施されることが決定した。先行調査として平成27、28年度、全国約2万人の中学3年生を対象に行なわれた内容は、「音読」「即興を前提とするやり取り」「ある程度の準備をした上で話すこと」であり、上記の調査は、同じような内容になると予想できる。このことから、「話すこと」を評価し、話す力を伸ばしていく必要があると考えられる。

そこで、「話すこと」について、大分市の中学生の実態を調べたところ、平成27年度大分市

| | 大分市 | 全国との差 |
|------|------|-------|
| 聞くこと | 47.3 | -2.7 |
| 読むこと | 52.2 | +2.2 |
| 書くこと | 52.0 | +2.0 |

標準学力調査の領域別偏差値を左表のようにまとめると、「聞くこと」が全国平均を下回っており、内容理解・対話文の応答など、まとまりやつながりのある英文の理解に困難を感じている生徒が多いことが

分かった。そこで、「聞くこと」に関して調べると、柴原智幸（2015）は、「聞くこと」と「話すこと」には深い相関関係があると述べている。そういうことから、大分市の中学生において、「聞くこと」「話すこと」の力が不足していると考えられる。

ここで私が昨年度担当した中学1年生を見ると、小学校で外国語活動をしてきたことで、英語の音に慣れていた一方で「もう、英語むり！」とすぐに弱音を吐く生徒もいた。そこで、今まで学んできたことの振り返りと定着が短時間ででき、さらに英語に自信をもたせたいとの思いから、授業冒頭の短時間で毎時間継続してできる帯活動を取り入れた。活動の内容として、小学校で多く行っていたペアとのQ&A活動を活用して実施したところ、生徒が意欲的に取り組み、活発に会話を楽しむ姿が見られた。

一方で、話す話題が決められていない即興的なALTとの1分間トークや個別の面接では、会話が続かなかつたり、感情表現が少なかったりと、達成感の得られない結果であり、「話す力」をさらに高める授業の重要性を痛感した。そこで、授業で効果的であったペア・ワークでのQ&A活動や、短時間で継続的にできる帯活動をどのように工夫すれば、生徒がALTと英語で幅広い話題について即興を前提としたやり取りができるのかを研究してみたいと考えた。

先行研究によると、平木 裕（2016）は、「新教育課程における中学校外国語科の指導と評価の中で、習得した知識や技能は『生きて働く』必要な場面で使えるものでなければ意味がなく、実際のコミュニケーションの場面の中で使うことを前面に出さなければならない」「『未知の状況にも対応できる』ためには、ペアやグループでのやり取りを重視するなど、相手の発話や与えられた状況にその場で対応する必要がある言語活動を工夫することが重要である」と述べている。また、「話すこと」の指導については、「その場で考えながら口頭で表現することにこそ『話すこと』の意味があることを生徒に意識させ、即興性や伝えるべき内容を重視しながら段階的に指導することが大事である」と述べている。

さらに、津田雅子（2011）は、「用意した文章を暗記してスピーチするだけでは、将来グローバルに活躍する日本人を作り出すことにはつながらず、即興で表現することへの移行が必要である」としている。そして、「『即興で話す』ということは、訓練が必要であり、継続的に指導しなければならない」と述べている。

これらのことから、「話すこと」には、「必要な場面で、即興でやり取りができること」が重要であり、その力を付けるためには、ペア・ワークやグループ・ワークを活用し、即興的なやり取りをする場面を多く取り入れた活動を授業の中に位置付け、継続的に行わなければならないと考える。

こうしたことから、具体的に、即興的なやり取りができる力を育むためには以下の4つの手立てが重要であると考えた。

- ①話す活動を授業の冒頭の短時間で毎時間継続できる「帯活動」として位置付ける。
- ②「帯活動の目標設定リスト」を作成し、「学校行事などの生徒の実態」「教科書の単元や既習事項」と「帯活動」のテーマや内容との関連性を生徒が一目で把握でき、見通しや目標をもつことができるようにする。
- ③「帯活動」でペア・ワークを活用した「話すこと」[やり取り]中心のQ&A、インタビュー活動、

会話に必要な相づちや決まり文句の練習などを段階的に行い、毎回目標に対する振り返りをさせる。(自己評価とペアからの一言)

- ④「話すこと」の評価テスト(パフォーマンス・テスト)を位置付け、生徒に実施日やテーマ、評価内容を知らせることで、明確な目標をもち、「話すこと」の意欲付けをし、パフォーマンス・テスト後に「話すことができた実感や達成感」を味わわせる。

以上の考えから、「帯活動」「目標設定リスト」「ペア・ワーク」「目標に対する振り返り」「パフォーマンス・テスト」をキーワードとし、本主題を設定することにした。

3. 研究仮説

ペア・ワークを活用した「話すこと」[やり取り]中心の帯活動(Q&A,インタビュー活動,相づちや決まり文句練習など)において、目標設定リストに基づいて、系統的,継続的に行い,生徒に目標を達成する喜びや成長を共に実感させることができれば,日常的な話題について,事実や考え,気持ちなどを簡単な語句や文を用いて即興で伝えたり,質問に答えたりして,やり取りができる力を育てることができるであろう。

4. 全体構想

研究主題

即興を前提とするやり取りができる力を育む英語授業の工夫
～目標設定リストに基づいた系統的な帯活動を通して～

研究仮説

ペア・ワークを活用した「話すこと」[やり取り]中心の帯活動(Q&A,インタビュー活動,相づちや決まり文句練習など)において,目標設定リストに基づいて,系統的,継続的に行い,生徒に目標を達成する喜びや成長を共に実感させることができれば,日常的な話題について,事実や考え,気持ちなどを簡単な語句や文を用いて即興で伝えたり,質問に答えたりして,やり取りができる力を育てることができるであろう

研究内容

- 1 即興を前提とするやり取りができる力を育成するための文献調査・先行研究調査
- 2 即興を前提とするやり取りができる力を育成する英語授業

事前調査・検証授業・事後調査

研修のまとめ・成果と課題

5. 研究の方法

(1) 文献調査・先行研究調査

- ①即興を前提とするやり取りについて
- ②帯活動について
- ③帯活動の目標設定リストについて
- ④パフォーマンス・テストについて

(2) 実態把握

- ①第1回パフォーマンス・テストの内容と評価
- ②第1回英語学習に関するアンケートの内容と結果分析

(3) 帯活動

(4) 検証授業（「その場で英語のやり取りができるために大事なことは何だろう」）

(5) 抽出生徒について

(6) 事後調査

- ①第2回パフォーマンス・テストの結果分析
- ②第2回英語学習に関するアンケートの結果分析

(7) 研究のまとめ・成果と課題

6. 研究の内容

(1) 文献調査・先行研究調査

①即興を前提とするやり取りについて

中学校新学習指導要領において、第2章第9節第1外国語の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す」としており、具体的に「実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能」や「簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりすることができる力」を身に付けるよう示唆している。

さらに、「話すこと」[やり取り]の目標は、「関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする」であり、「話すこと」[発表]においても、「・・・即興で話すことができるようにする」とあり、「話すこと」において、「即興」が重視されていることが分かる。

そこで、「即興」について辞書（世界大百科事典）で調べてみると「あらかじめ準備か深慮がほとんどなく（少し、または全くない）、その場で思いつくままに作り出すこと」と記されている。即興劇や即興曲（演奏）などの芸術面の創作活動から来ており、以下の3つの視点から分類することができる。

- ・既存パターンに基づいて装飾を加える「部分的即興」
- ・与えられた主題について自由に装飾を加える「発展的即興」
- ・既存のものや主題を用いなくて新しいものを作り出す「全体的即興」

このことから、中学校新学習指導要領における「話すこと」の「即興」に置き換えて考えたところ、既習の言語材料に基づいて、自分や相手の立場に置き換えるなど、一部分を換えて表現することが、「部分的即興」に当たり、決められた話題やテーマについて既習事項を参考にしながら、情報や自分の考えなどを基に表現するのが、「発展的即興」に当たるのではないかと考える。つまり、中学校の英語教育で言う「即興」とは、既習事項から段階的に様々なパターンを繰り返し練習していくことで、自分の話したいことを、自由に表現できる「全体的即興」に近づけていくものではないかと言える。よって、即興を前提とする「部分的即興」「発展的即興」から、完全な即興である「全体的即興」への移行段階が中学校の英語教育であると考えられる。

これらのことから、「話すこと」[やり取り]において、「即興で伝え合うこと」の最終的に目指すものは、「全体的即興」であり、話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、また、会話の途中で、不自然な沈黙などを置かずに関わりと事実や意見・気持ちなどを伝え合うことであると捉える。

ここで、平成27年度英語力調査結果(中学3年生)を見てみると、全国約2万人を対象に「話すこと」について調査をしたところ、テストの総合点が高い生徒ほど、授業で「与えられた話題について、(特に準備をすることなく)即興で話す活動をしていた」と答えた割合が高かった。また、学校の取組紹介の中で、「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能全てが全国平均を大きく上回っている学校において、「与えられた話題について、即興で話す活動」の実施率は、全国平均が49.6%に対して、76.5%と非常に高いことが分かった。また、授業の取組として、「英語をどの程度使えるようにするのか目標の設定を行う」「徹底的なペア・ワーク、グループ・ワークでコミュニケーション能力の基礎を育成する」「ALTの先生を活用したパフォーマンス・テスト(話す力の評価テスト)を実施する」の3つが挙げられている。

これらが示すことから、目標設定と評価の必要性と、他者と協力しながらアウトプット(習った知識・技能を使って表現する活動)を行い、即興で話す機会を多くもつことが、話す力を育成するために必要であると考えられる。

また、即興的なやり取りの指導において、平木は、「一問一答の形式的な会話ではなく、相づちや、相手の発言に合わせて質問し、会話を広げていくこと」や「相手の発話ポイントを繰り返したり、賞賛の言葉を使用することを促したりすることで、分かり合おうとする姿勢を育てること」「ペアの組み方を工夫し、互いに教え合い、助け合いができる雰囲気を作ること」が大事であると述べている。

つまり、やり取りを行う際は相手の発話に応じることが重要であり、それに関連した質問や意見を述べ、互いに協力して対話を継続・発展させなければならない。このようなことから、即興的なやり取りができる力を付けるためには、「ペア・ワークを用いて生徒にとって身近で関心のある場面や会話のモデル(基本パターン)を設定した上で互いに協力しながら、段階的、継続的に伝え合う練習を徹底して行うこと」、「目標設定と振り返り(自己評価とペアからのコメント)、パフォーマンス・テストなどの評価を確実に行うこと」で生徒が自分たちの成長や達成の喜びを実感することが重要であると考えられる。

②帯活動について

松沢伸二（2014）によると、「帯活動とは、『短時間継続的に行う投げ込み活動』を指す学校英語教育独特のネーミングである」とある。授業の中では帯活動を Warm-up（ウォーミング・アップ）や Review（復習）の代わりにすることができ、教師と生徒による英語での短い対話や、簡単なゲーム、毎回教師が示す話題についてペアで簡単な対話を行い、結果を報告する Short Dialogue の活動など様々である。松沢は「帯活動には、既習の言語材料の定着という拡大的な復習の役割と、螺旋的に毎時間繰り返すことで『話せるようになった！』という有能感を生徒に与えることが期待できる」と論じている。

また、松沢は、帯活動の目的として、『英語への興味をかき立てる』、『英語を学ぶ喜びを味わう』、『英語学習への意欲を増す』、『英語学習でのつまずきを取り除く』、『言語材料を定着させる』、『有能感を与える』、『Warm-up や Review の代わりにする』に加えて、『生徒が苦手としていることを克服する』や『生徒に特に伸ばしたい技能に焦点を当てて取り組ませる』など多くが挙げられる」としている。さらに、帯活動は、「目の前の生徒のニーズやウォンツ(要求)、さらには教師自身の好みや夢を勘案して、教師が自らの独自性を発揮し、創造性を生かせる点が魅力である」と述べている。

さらに、先行研究（鳴門教育大学大学院学校教育研究科 石濱博之研究室 寺尾順子教諭）によると、検証授業の結果より、「帯活動は話すことの抵抗感を低くし、表現に慣れるためにも有効である」「即興性と流暢さというものはすぐさま身に付くものではなく、帯活動として日々の授業の中で取り組んでいき、生徒が話すことに慣れることがもっとも大切なスタートである」と述べており、帯活動のさらなる推進の必要性を示している。

このように、帯活動は、生徒の実態に応じて、教師が目的や目標をスモールステップで定め、短時間で継続的にできる貴重な時間であると考えられる。この活動を有効に活用することで、教師が、今までなかなか授業で確保できていなかった「話すこと」[やり取り]中心のアウトプットの活動を固定化し、積み重ねていくことで生徒に「話す力」と「話すことが出来た有能感と自信」を付けることができるのではないかと考えられる。

③帯活動の目標設定リストについて

中学校新学習指導要領において、中学校英語学習では、「小学校における学習内容の定着を図るために必要なものを言語活動を通して指導すること」や、「指導計画の作成に当たり、実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、小学校第3学年から第6学年までに扱った簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着を図ること」としており、小学校の学びを十分生かすことが不可欠であることが述べられている。

また、松浦伸和（2014）は、「新学習指導要領における外国語科のキーワードは『つなぐ』で、『技能と技能をつなぐ（技能の統合）』、『言語材料と言語活動をつなぐ』、そして『（小中、中高など）学校と学校をつなぐ』、の3つがキーとなっている」と示している。

これらのことから、中学校の教師が、小学校でどのような外国語活動が行われてきたかを理解するために、まず、使用されている教材の内容や授業で行われてきた活動などをしっかり把握す

ること、事前に生徒にアンケートをとって実態把握などの準備をした上で、授業を行うべきではないかと考える。そこで、小学校の外国語活動で使っている、Hi, friends!1,2 の内容や指導計画を調べ、その中に出てくる会話表現や単語、言語活動などを、中学校の英語学習でも引き継ぎ、繰り返し活用することで、さらなる定着を図っていくことが重要であると考えられる。

そうしていくことで、生徒が小学校外国語活動とのつながりを実感し、英語学習への目的意識や意欲と自信を持ってこれからの英語学習に向かっていくことができると捉える。

ここで、中学校新学習指導要領第2, 3「指導計画の作成と内容の取扱い」を見てみると、「学年ごとの目標を適切に定め、3年間を通じて外国語活動の目標の実現を図るようにすること」また、「コミュニケーションを行う目的、場面、状況などを明確に設定し、言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すことにより、生徒が学習の見通しを立てたり、振り返ったりすることができるようにすること」と示されている。

さらに、題材については、「生徒の興味・関心や学校行事で扱う内容と関連付ける工夫」が求められ、「生徒の発達の段階に応じて、平易なものから難しいものへと段階的に指導することが必要である」と述べられている。

これらのことから、授業に当たっては、生徒の実態に応じた系統性（順序や段階を踏まえ、統一性のあるもの）をもった目標設定と言語材料の選択が重要であると言える。つまり、3年間、各学年、学期、単元の目標を生徒の興味・関心・発達の段階や学校行事など生徒の実態に応じて、計画的に帯活動を設定する必要があると考えられる。それらをリスト化し、生徒に提示することで、生徒が目指すゴールの姿をイメージし、目的意識を持って英語学習に向かうことができると考える。さらに、帯活動で使われる既習事項をリストに入れることで、英語学習が小学校から現在に至るまでつなげられ、確実に身に付いてきていることを実感できると捉える。

④パフォーマンス・テストについて

平成31年度全国学力・学習状況調査で、中学3年生全員対象に「話すことの技能」の調査（パフォーマンス・テスト）の実施が予定されている。平成27, 28年度に先行調査として行われた、約2万人対象に実施された調査の内容を見てみると、平成28年度は、A「音読問題」、B「質疑応答問題」、C「意見陳述問題」であった。さらに、B「質疑応答問題」とC「意見陳述問題」の内容を具体的に見てみると、B「質疑応答問題」では、「個人の体験や考えをもとに、もしくは聞いたり読んだりしたことをもとに、質問に対して即座にかつ適切に応答することができるかを問う問題」で、現行中学校学習指導要領の「話すこと」の「自分の気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えることができる」や「聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすることができる」力を問う問題となっていた。また、C「意見陳述問題」では、「与えられた話題について、個人の考えや経験などに基づいて自分の意見とその理由を述べる力を測定する問題」で、現行中学校学習指導要領の「話すこと」の「つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けることができる」「与えられたテーマについて簡単なスピーチをすることができる」力を問う問題であった。これらのことから、「話す力」の重要性と、授業の中で「話す力」を十分に付けていく必要性を強く感じた。

ここで、パフォーマンス・テストについて調べてみると、小泉（2002）は、「パフォーマンス・テストとは、従来のペーパーテストとは異なり、口頭での発話に基づき、受験者の英語を話す能力を測るテストである」とあり、中村（2005）は「スピーキングテストやライティングテストを実施して言語表出能力を測定するもの」と述べている。また、授業改善委員会によると「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」と「外国語表現の能力」を測るものであるとしている。

さらに、佐藤一嘉（2014）は著書の中で、「従来の筆記テスト重視の授業に比べ、教師が授業をコミュニケーション重視に変え、パフォーマンス・テストを実施することにより、生徒のモチベーションが上がり、学習効果が高まることがわかった」とあり、さらに「学習者のみならず教師が授業の目的をやり遂げようというモチベーションが上がる（波及効果）」と述べている。

また、評価について、Bachman(1990)および Savignon(1983)は unitary rating（単一的な基準）を批判し、componential rating(分割的な基準)を推奨し、いくつかのカテゴリーに分割して評価基準を設定したほうが、信頼性も高く、学習者へのフィードバックも容易であると主張している。

以上のことから、パフォーマンス・テストを授業の中に設定することの必要性和有効性が分かる。また、帯活動の目標設定リストを作成するに当たり、最終的に身に付けさせたい姿（理想像）から、それまでに必要な力を段階的に測る（評価する）ため、パフォーマンス・テストを設定し、帯活動でどんな力を付けさせたいかの小ゴールを計画するバックワード・デザイン（逆向き設計）の視点が必要であると考えられる。

（2）研究の実際と考察

①実態把握

i 第1回パフォーマンス・テストの内容と評価

第1回目のパフォーマンス・テストは、「話す力」の実態を把握するため、7月4日に、中学2年生全員（128名）を対象に、以下の通り、その目的（目標）・日時・内容・手順・評価など事前に生徒に知らせた上で実施した。

中学2年 第1回パフォーマンス・テスト（話す力のテスト）

☆目標：ALTの先生と英語で1分間会話（やり取り）を続けることができるようになるう！

☆日時：7月4日（火）（1～4限）

☆場所：少人数教室

☆内容：テーマ「夏休みの予定」を中心にした話題

☆手順：

（1）出席番号順に、一人ずつALTの先生の前に座り、自分の名前と出席番号を伝える。

（次の4人は廊下のいすにすわって静かに待ち、一人出たら次の人が入室。教室では一人戻ってきたら次の一人が廊下のいすへ）

（2）ALTの先生がまず、質問するので、質問に回答した後、会話を続ける。1、2文をつけたりALTの先生にも質問したり、言いたい事・聞きたい事を習った英語でなんとか伝えるようにする。相づち・つなぎ言葉・シャドーイング（相手の発話（の一部）を繰り返し確認する）・ジェスチャーを使うなど不自然な沈黙がない会話を旨とする。

(3) 10秒前の合図がなったら、ALTの先生と挨拶を交わして終了。

(4) 教室に戻ったら、アンケート用紙(自己評価用紙)に記入し、提出する。

☆評価：3つの観点 ①積極性(目を見る・相づち、つなぎ言葉、聞き返し、ALTへの質問など)

②正確さ(文法や質問と応答の整合性など)

③流暢さ(語数)

☆今後のパフォーマンス・テストの予告：第2回目2学期末予定 テーマ「2学期の思い出と冬休みの予定」

評価は、3つの観点、「積極性」「正確さ」「流暢さ」で、事前にALTと相談しながら評価表を作成した。(表1)

(表1)

第1回パフォーマンス・テスト(話す力)の評価表～ALTとの即興を前提とするやり取り～
第1回目のテーマ：「夏休みの予定」を中心にした1分会話

| 項目 | 評価基準 評価の判断基準 | 得点 | | |
|------------------------------|---|--------------------|------------------------|-------------------|
| | | A(2点) | B(1点) | C(0点) |
| 積極性 motivation (計4点満点) | ALTへの質問を行ったか。 | 2回以上できた | 1回できた | 少し、または全くできなかった |
| | ①アイコンタクト (相手の目を見ての会話) ②相づち ③つなぎ言葉 ④聞き返し | 4つの内2つ以上できた | 4つの内1つできた | どれも全くできなかった |
| 正確さ accuracy (計4点満点) | 適切な文法や表現を用いていたか。 | 文法や語彙に誤りがほとんどない | 文法・語彙に誤りがあるが、問題なく理解できる | 理解を妨げる文法・語彙の誤りがある |
| | 質問と応答の整合性はあったか。 | 相手の質問や答えに適切に回答している | 質問や答えに一部適切に回答している | 質問や答えに適切に回答していない |
| 流暢さ fluency (計2点満点) | 語数は何語だったか。(目標：1分45語) | 36WPM以上 (目標の8割) | 27WPM～35WPM (目標の6割) | 26WPM以下 |

*WPM: Words Per Minute 語/分

流暢さについて調べたところ、ネイティブが日常話す速度は、1分間に約200～500語で、BBCのアナウンサーは、100～110語を話す目安にしている。中学生であれば80～90語で十分とされており、「相手にしっかり伝わる」スピードを心がけることが重要視されている。

そこで、今回は、1分間に90語を目標として、会話のやり取りのため、その半分の45語を最高点と設定し、その8割(36語)以上をA、6割(27語)以上をBとし、それより少ない語数をCとした。語数は、カウンターを使用し、ALTがカウントを行った。得点については、表1の評価基準を設け「積極性」計4点、「正確さ」計4点、「流暢さ」計2点の合計10点満点で、ALTと相談しながら、その都度評価を行った。

ii 第1回パフォーマンス・テストの結果分析

第1回パフォーマンス・テストを終えて、図1の評価表を各クラス、全体で集計・分析を行ったところ、次のような結果であった。(表2)

| 項目 \ クラス | 2-W | 2-X | 2-Y | 2-Z | 2年全体 (128名) |
|----------------|----------|----------|----------|----------|----------------|
| 積極性 (4点満点) | 2点 | 1.6点 | 0.9点 | 1.4点 | 1.5点 |
| 正確さ (4点満点) | 3点 | 2.8点 | 2.8点 | 3点 | 2.9点 |
| 流暢さ (2点満点) | 0.2点 | 0.3点 | 0.2点 | 0.3点 | 0.2点 |
| 合計点 (10点満点) | 5.3点 | 4.7点 | 3.8点 | 4.6点 | 4.6点 |
| 最高点と その人数 | 9点 1名 | 7点 7名 | 7点 1名 | 8点 1名 | 9点 1名 |

2年生全体では、平均点が4.6点で、その内「正確さ」が4点満点中2.9点であったのに対して、特に「流暢さ」では、平均点が0.2点で1分間に26語以下が128名中102名という結果となり、課題が多いことが分かった。また、「積極性」の中の会話の基本である「アイコンタクト」も取れない生徒が多くいた。さらに、生徒が慣れないことからくる緊張や正確さにこだわるばかりに、語彙が出てこなかったり、会話を続けるルールを知らなかったりすることが判明した。このような結果からも、生徒が正確さへのこだわりよりも英語で会話を続けるための語彙や表現、ルールを身に付けながら、それを使う(アウトプットする)機会を多くもつことで、失敗を恐れず、自信をもって会話を続けようとすることができると考えた。

iii 第1回英語学習に関するアンケートの内容と結果分析

第1回パフォーマンス・テストを終えて、7月4日～7月7日に「英語学習に関するアンケート」を126名対象に行った。内容については、以下の通りである。

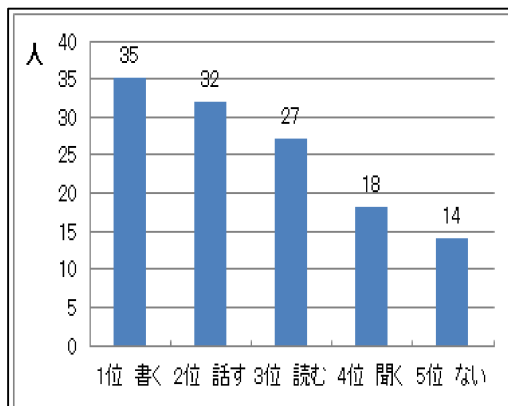
英語学習に関するアンケート(第1回パフォーマンス・テストを終えて)

★次の質問に当てはまるものに○を、()に文章を書いてください。

1. 英語学習の中で、聞くこと、話すこと、書くこと、読むことのどれが1番好きですか。
また、そう思う理由を書いて下さい。
2. 英語学習の中で、どれが1番苦手、難しいですか。また、そう思う理由を書いてください。
3. これからどんな力を一番付けたいですか?また、そう思う理由を書いて下さい。
4. パフォーマンス・テスト(話す力のテスト)をやってみてどうでしたか。
 - (1) ALT が言っていることが
(よく分かった/半分以上分かった/少しは分かった/ほとんど分からなかった)
 - (2) ALT の質問に答えることが
(よくできた/半分以上できた/少しはできた/ほとんどできなかった)
 - (3) ALT との会話の中で、相づちやジェスチャーなど会話を続けようとする努力は
(よくできた/まあまあできた/少しできた/全くできなかった)
 - (4) ALT と会話を続ける時に、困ったことやこう言いたかったのに言えなかったことを書いて下さい。
 - (5) 英語で会話を続けることについて感想や気付いたことを書いてください。
 - (6) 今回のパフォーマンス・テストの自分の出来は?
(よくできた/まあまあできた/あまりできなかった/全くできなかった)

アンケート結果より、「好きな英語学習」では126名中1位は「書くこと」で35名、2位が「話すこと」で32名であった。(図1) また、その理由については以下の通りであった。(複数回答可)

(図1) <一番好きな英語学習>

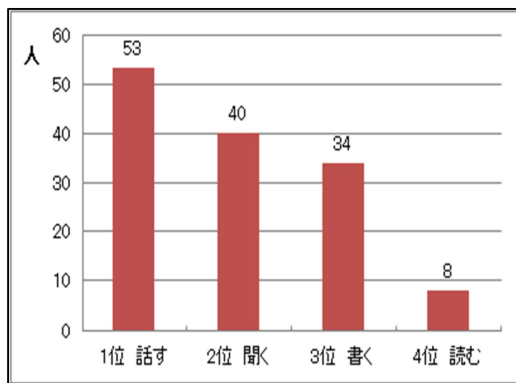


<その主な理由>

- 楽しい ○話せたら（伝わったら）うれしい
- 英語で会話をしてきたことが活かしていると実感できる
- 英語で言える範囲が広がったと感じた時や上手く言えた時
うれしい
- 段々相手の言ってることが分かるようになって会話が途切れなくなる時すごい達成感がある
- 知識がどこまで役に立つか分かってコミュニケーションをとるのが好き など

次に、「苦手な英語学習」では、1位が「話すこと」で53名、全体の42%の生徒が、「話すこと」に苦手意識をもっていることが分かった。(図2) また、その理由は以下の通りであった。

(図2) <一番苦手な英語学習>

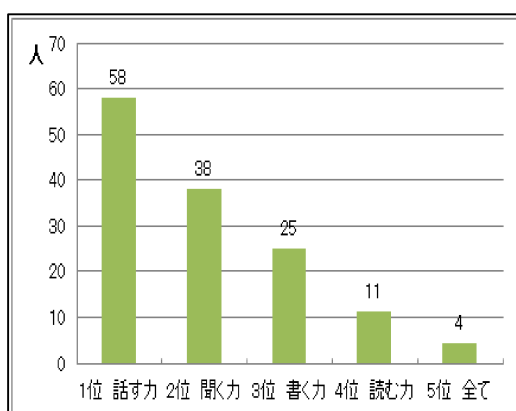


<その主な理由>

- あまり慣れない ○答えがよくわからない
- 自分が言いたいことを英語に変えるが難しい
- しっかり話せるか緊張して頭の中で英文がまとまらない
- 単語や文を工夫して組み合わせないといけない
- 自分で考えながら文法などにも気を付けないといけない
- 細かいことを気にしすぎてスムーズに話せない
- 口に出すのが得意でなく何もなくて話すのは苦手 など

一方、「一番付けたい英語の力」は、「話す力」が第1位で、58名、全体の46%の生徒が「話す力」を付けたいと思っていることが分かった。(図3) その理由は以下の通りであった。

(図3) <一番付けたい英語の力>



<その主な理由>

- 苦手だから直したい ○発音をもっと良くしたい
- 実際に外国人と話せるようになりたい ○語学力を試したい
- 外国に行った時に自分の考えを話せるようにしたい
- 海外で一番必要なのは話す力だ（実用性がある、役に立つ）
- オリンピックなどがあるなど外国人がとて増えるから
- 話す力を付け、将来色々な人とコミュニケーションをとりたい
- いざ社会に出ると、海外に行った時に英語で話せたほうがいい
- 世界共通の言葉でたくさんの人と話することができる言葉だから
など

「一番付けたい英語の力」の主な理由において、「苦手」や「できない」という現状から「力を付けたい」というものも、もちろんあったが、「海外で一番必要なのは話す力だと思う」や「外国

に行った時に自分の考えを話せるようになりたい」「話す力を付け将来色々な人とコミュニケーションをとりたい」など「話すこと」の実用性や将来を見通した必要性を感じている生徒が多いことが分かった。

以上のようなアンケート調査から、生徒の実態を分析すると、「英語を話すこと」は生徒にとって理想・夢であり、将来性や実用性を強く感じるものであると捉えられる。しかし、現実には、発音や文法などの不安や使用頻度の少なさや使い方（用法）を知らないことからくる不安など多くの困難を抱えていることも分かった。一方、「話すこと」で伝わったり、活かせたりできたときの達成感、自分の能力の範囲が広がったことを実感できる喜びにより、自信や意欲、向上心が膨れ上がり、もっと学びたいという「英語学習に向かう意欲」となり、それが相乗効果をもたらすと見える。

このような生徒の声から、「英語を話すこと」とは、「学んだ英語で伝え合う喜びや達成感を実感すること」であり、その体験を多く継続的に持つことが、今、必要であると考え、帯活動を実施することを決心した。

②帯活動

i 目標設定リスト

(表 3)

| 帯活動目標設定リスト (即興的なやり取りの力) 中学2年2学期 | | | | | | | | | | | |
|---------------------------------|-----------|----------------------------|---|---------------------------------|---|---|---|-----------------------------------|---|---|---|
| 月 | 授業 No. | 行事・実態など | 単元名 新出文法 | 帯活動の 目標 | 帯活動の内容 (主な表現) | 関連事項 (既習事項) | 関連 ページ | | | | |
| 7 | | 第1回パフォーマンス・テスト (夏休みの予定) | Lesson3 The Ogasawara Islands 未来形 will be going to~ | | | | | | | | |
| 8 | | ↓ 始業式 職場体験学習 | | | | | | | | | |
| 9 | 41 | 課題テスト | Lesson4 Enjoy Sushi There is(are) 動名詞 | 1. 夏休み何をしてどうだったか(1分) (部分→発展) | ★What did you do during the summer vacation? ●しゃべくり(1) | ・過去形 (一般動詞) ・過去形 (不規則動詞) went/ate/bought ・by car ・What do you? ・How are you? ・go to~ ・What color is it? ・Do you~? | 1年L9 (P.111) 1年LT8 (P.110) Hi.Friends 1.2 | | | | |
| 42 | ●しゃべくり(2) | | | | | | | | | | |
| 43 | ●しゃべくり(3) | | | | | | | | | | |
| 44 | ●しゃべくり(4) | | | | | | | | | | |
| 45 | ●しゃべくり(5) | | | | | | | | | | |
| 46 | ●しゃべくり(6) | | | | | | | | | | |
| 47 | ●しゃべくり(7) | | | | | | | | | | |
| 48 | ●しゃべくり(8) | | | | | | | | | | |
| 49 | 49 | | | | Lesson5 Uturu (give,sing write,teach + A+B (look,feel)+A 感情(feelings) | | | 2. おすすめの 外食の店とメニュー(1分) (部分→発展) | ★Are there any other good restaurants in Oita? ●しゃべくり(1) | ・Are (s) there~? ・like-ing ・過去形 (be 動詞) ・Can you~? 助動詞 can ・What did~? | 2年L4 (P.42) 2年L4 (P.44) 2年L2 (P.12) Hi.F2 1年LT290 2年L1 (P.6) |
| 50 | ●しゃべくり(2) | | | | | | | | | | |
| 51 | ●しゃべくり(3) | | | | | | | | | | |
| 52 | ●しゃべくり(4) | | | | | | | | | | |
| 53 | ●しゃべくり(5) | | | | | | | | | | |
| 10 | 53 | 市新人戦 中間テスト | Lesson5 Uturu (give,sing write,teach + A+B (look,feel)+A 感情(feelings) | | ●しゃべくり(6) | | | | | | |
| 54 | ●しゃべくり(7) | | | | | | | | | | |
| 55 | ●しゃべくり(8) | | | | | | | | | | |
| 56 | | | | | | | | | | | |

帯活動を実施するにあたって、まず教育課程を基に帯活動の目標設定リストを作成した。リストには、月、行事、生徒の実態、教科書の単元、帯活動の目標・内容・会話表現、小学校から中学校現在までに習った関連事項とそのページを記載し、系統的になるように作成した。(表 3)

表 3 は、2年生の1学期から2学期末までの帯活動の目標設定リストで、1学期末に、第1回パフォーマンス・テストを実施し、2学期始めに検証授業の中で1回目の帯活動を開始した。帯活動の内容として、テーマは、行事、生徒の実態、教科書の単元や内容を関連付けるものであることに重点を置いた。また、会話のモデルとし

| 月 | 授業 No. | 行事・ 実態など | 単元名 新出文法 | 帯活動の 目標 | 帯活動の内容 (主な表現) | 関連事項 (既習事項) | 関連 ページ |
|----|--|---------------------|---|---|---|--|--|
| 10 | 57 | (合唱練習) | USE Write 好きな国について エッセイを書 | 3. 好きな(得 来行きたい)国 は?とその理由 (1分) (部分・発展) | ★What's your favorite country? Why? ●しゃべくり(1) | ・What's up? | 1年LT7 2年LT2 1年L9 2年L5 1年LT9 |
| | 58 | | | | ●しゃべくり(2) | ・have fun | |
| | 59 | | | | ●しゃべくり(3) | ・Why do you-? | |
| | 60 | | | | ●しゃべくり(4) | Because... | 2年L2 (P.14) |
| | 61 | | | | ●しゃべくり(5) | ・接続詞 when | 2年L3 (P.28) |
| | 62 | | | | ●しゃべくり(6) | ・接続詞 that | 2年L3 (P.28) |
| 11 | 63 | 文化発表会 | LL4 機内 LT5 もっといた だけですか Lesson6 My Dream ・不定詞 | 4. 修学旅行で 行く観光地と その理由 (1分) (部分・発展) | ●しゃべくり(7) | ・過去形(不規則) bought, went, had gave+A+B | 2年L3 1年L9 2年L5 (P.58) |
| | 64 | | | | ●しゃべくり(8) | ・look+形容詞 | 2年L5 (P.60) |
| | 65 | | | | ●しゃべくり(1) | ・look+A(感情) Why? | 2年L5 (P.60) 1年L8 |
| | 66 | | | | ●しゃべくり(2) | ・現在進行形 (確実な予定表現) How many-? | 1年L4 2年L4 (P.42) |
| | 67 | | | | ●しゃべくり(3) | ・Are(is) there-? | 1年L4 2年L4 (P.42) |
| | 68 | | | | ●しゃべくり(4) | ・未来形 will | 2年L3 (P.24) |
| 12 | 69 | 修学旅行 | Review 助動詞 can/will/may/must LL5 留守番電話 LT6 電話をしよう | 5. 修学旅行で 行く観光地と その理由 (1分) (部分・発展) | ●しゃべくり(5) | ・What time-? | 1年LT2 1年LT4 1年LT8 |
| | 70 | | | | ●しゃべくり(6) | ・How much-? | 1年LT2 1年LT4 1年LT8 |
| | 71 | | | | ●しゃべくり(7) | How-?by- buy A+B | 2年L5 (P.60) |
| | 72 | | | | ●しゃべくり(8) | What do you want to be? 不定詞(名) ・be...不定詞(動) | 1年L8 2年L6 (P.70) 2年L6 (P.72) |
| 73 | 期末テスト 第2回 パフォーマンス・テスト (修学旅行の思い出と冬休みの予定) | Project2 自分の夢を紹介 | | | | | 1年L8 |
| 74 | | | | | | | |
| 75 | | 英語学習法 | | | | | |

では、習ったことが使えることを実感できるように直前までに学んだこと（既習事項）を必ず取り入れるものに設定した。1回のテーマにつき8回シリーズで、少しずつレベルアップするように目標設定をした。2学期の第1回のテーマは「夏休み何をしてどうだったか」、第2回は「おすすめの外食の店とメニュー」の会話にした。2学期は第4回まで行い、学期末に第2回パフォーマンス・テストを行う計画にした。

→ 帯活動の目標との関連
 ... 表現・文法（既習事項）と関連性

ii 帯活動シート「しゃべくり英会話」

帯活動で使用するシートの作成に当たっては、生徒のアンケートの実態を十分考慮しながら、「学んだ英語で伝え合う喜び・達成感を実感する」帯活動シートを目指し、帯活動の目標設定リストに基づいて行った。作成する上で以下の点に配慮した。

- ・会話練習のモデルは、学んだこと（既習事項）で構成する。
- ・毎時間目標設定があり、段階ごとにレベルアップできるようにする。
- ・生徒の実態や興味にあった実用性のある話題（テーマ）にする。
- ・会話のモデルやパターン・ルールを繰り返し練習し慣れさせる。
- ・英語で言える範囲が広がったと実感させる。（相づちプラス、自分のことに置き換えて、もう1文プラスなど）
- ・ペア（伝え合う相手）と分かり合おう（受け入れよう）とする気持ちをもたせる。

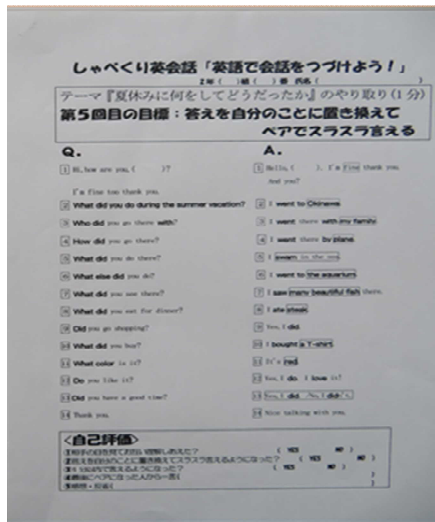
「間違いや失敗を恐れない」「協力してできる」を常に意識させる。

アイコンタクト、不自然な沈黙をなくす（5秒以内）、ペアからの一言メッセージなど

- ・活動後の自己評価で、前回までの自分より成長した点やペアから学んだことなどから達成感を感じ、次回はもっと成長したいと感じさせる。

図4は、帯活動シート「しゃべくり英会話」の5回目である。5回目は、会話のモデルを参考に自分のことについて部分的に置き換える活動で、8回の帯活動の中で「即興を前提とするやり取り」の基本となる重要な活動と捉える。以下のように「しゃべくり英会話」は、「英語でペアと1分間会話を続ける力を付けること」を大きな目標とし、1つのテーマに段階ごとの8回のシリーズになっている。8回にはそれぞれ目標があり、以下の通りである。

(図4)「しゃべくり英会話」5回目 (全ての回は別紙資料)



- 1回目:「シートを見てペアでスラスラ言える」
- 2回目:「答える人はシートを見ないでペアでスラスラ言える」
- 3回目:「バラバラ質問がペアでスラスラ言える」
- 4回目:「日本語から英語がペアでスラスラ言える」
- 5回目:「答えを自分のことに置き換えてペアでスラスラ言える」
- 6回目:「質問する人は相手の発言に相づちを打ってペアでスラスラ言える」
- 7回目:「答える人は1文プラスしてペアでスラスラ言える」
- 8回目:「クラスの誰とでも1分間話し続けることができる」

8回目では、それまで行ってきたインプット、アウトプット活動を活かして、色々な相手と相手の発話に応じて、即興を前提とするやり取りができる力を実感できると考える。(図5)

また、それぞれの回には、振り返りとして、各回の目標に対してどうだったか、今日使えた表現や今度使ってみたい表現、ペアから学んだこと、前回と比べて自分の成長したところ、ペアからの一言、感想・反省等の評価スペースを設け(図6)、教師が回収後、個別のアドバイスやコメントを記入しながら支援や励ましをすることができるようにした。

(図5)「しゃべくり英会話8回目」

しゃべくり英会話「英語で会話をつづけよう!」2年()組()番 氏名()

テーマ『おすすめの外食の店とメニュー』のやり取り(1分)

第8回目の目標: 即興で誰とでもテーマについて会話を続けることができる(沈黙5秒以内!)

1. 言いたい情報(自分が行った事がある店(おすすめ)の紹介)

①店の名前:

②種類:

③いつ行った?

④誰と行った?

⑤何を食べた?

⑥どうだった?

⑦その他伝えたい情報:

2. 聞き取った情報

| | |
|-----------|---------------|
| <相手の名前> | <会話から聞き取れた情報> |
| ①()から() | () |
| ②()から() | () |
| ③()から() | () |
| ④()から() | () |

(図6)自己評価(「しゃべくり英会話」5回目)

<自己評価>

①相手の目を見てお互い理解しあえた? (YES NO)

②答えを自分のことに置き換えてペアでスラスラ言えるようになった?(YES NO)

③1分以内で言えるようになった? (YES NO)

④ペアになった人から一言()

⑤前回と比べて自分の成長した所()

⑥ペアから学んだこと()

⑦感想・反省()

自己評価(「しゃべくり英会話」8回目)

<自己評価>

①相手の目を見て会話ができただ? (YES NO)

②ペアと何も見ないで言えるようになった? (YES NO)

③1分間会話を続けることができた?(5秒以上の沈黙なし) (YES NO)

④ペアの言っていることが聞き取れた? (YES NO)

⑤相づちを使うことができた? (YES NO)

⑥相手に質問することができた? (YES NO)

⑦相手の質問に答えることができた? (YES NO)

⑧最後に話した人から一言()

⑨今日話した相手から学んだこと()

⑩感想・反省()

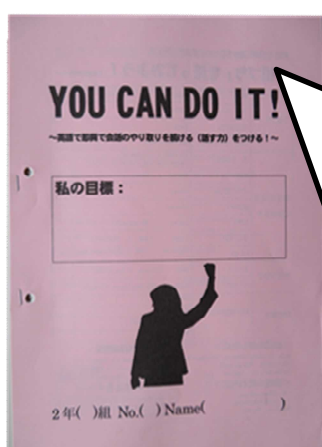
(図7) 生徒の自己評価と教師のコメント

| | |
|---|--|
| <p><自己評価> ①相手の目を見てお互い理解し ②答えはシートを見ないで ③1分以内で答えるようになった ④最後にペアになった人から一言(とても楽しそうだったのでよかった) ⑤感想・反省(時間内に言えたのでよかった)</p> | <p>とても楽しそうでこっちも楽しくなった (ペア) 時間内に言えたのでよかった しっかり目を見て良かった!次からもよろしくお願いします (ペア) 目を見て言えただけ見ないでスラスラ言うのは難しいので頑張ります</p> |
| <p><自己評価> ①相手の目を見て、お互い伝え合えた? ②日本語から英語がスラスラ言えるようになった? ③1分以内で答えるようになった? ④最後にペアになった人から一言(とても楽しそうだったのでよかった) ⑤感想・反省(とても楽しそうだったので、昨日より上手になりました)</p> | <p>楽しかったけど分かりやすく言ってくれてありがとう (ペア) とても難しかった。でも昨日よりはうまくできた 文の内容が伝わりやすくてよかったです (ペア) ゆうなちゃんの聞きながら、うなすけました</p> |
| <p><自己評価> ①相手の目を見てお互い理解し ②相手の前に相手の答えに相手 ③1分以内で答えるようになった ④最後にペアになった人から一言(上手だね) ⑤感想・反省(相づちをいれ、会話がスムーズに進んだ)</p> | <p>上手だね (ペア) 相づちを入れると会話がスムーズに進んだ Nice speak!! (ペア) 相づちを打つことで会話感がでてよかった 相づちうまかったよ。すごっ!楽しかったよ!(ペア) 自然な感じの相づちだったと思う!</p> |
| <p><自己評価> ①相手の目を見てお互い理解し ②相手の前に相手の答えに相手 ③1分以内で答えるようになった ④最後にペアになった人から一言(Nice speak!) ⑤感想・反省(相づちを打つことで会話感がでてよかった)</p> | <p>場面によって変えるのは難しいけど一緒に頑張っていこうね!(ペア) 次は相づちも同じのばかりでなく違うのも言いたい 大丈夫!あんまり慣れてないから大変だけど相づちうれしかったよ!(ペア) 同じような相づちばかりしてしまった</p> |
| <p><自己評価> ①相手の目を見てお互い理解し ②答える人は1文 ③1分以内で答えるようになった ④最後にペアになった人から一言(受け答えできてよかった) ⑤感想・反省(一文増えたことで会話することが楽しくなった)</p> | <p>笑顔で大きな声で楽しかった!Nice (ペア) 相づちもできたし、プラス1文も言えてよかった</p> |
| <p>④ペアになった人から一言(いつも目を見てくれるし、うれしいです!) ⑤前週と比べて自分の成長した所(英語を自分の声で話せるようになった) ⑥ペアから学んだこと(自分のこと置き換えても自然でよかった (ペアから学んだこと)) ⑦感想・反省(もっと相手の目を見れるようにしたいです (感想))</p> <p>④ペアになった人から一言(楽しく英語を話せた! Good! 楽しい!) ⑤前週と比べて自分の成長した所(英語を自分の声で話せるようになった) ⑥ペアから学んだこと(自分のこと置き換えても自然でよかった (ペアから学んだこと)) ⑦感想・反省(もっと相手の目を見れるようにしたいです (感想))</p> <p>④ペアになった人から一言(相づちが互いできてよかった) ⑤前週と比べて自分の成長した所(相づちがうまくなった) ⑥ペアから学んだこと(自分のこと置き換えても自然でよかった (ペアから学んだこと)) ⑦感想・反省(もっと相手の目を見れるようにしたいです (感想))</p> <p>④ペアになった人から一言(自分のこと置き換えても自然でよかった (ペアから学んだこと)) ⑤前週と比べて自分の成長した所(スラスラは言えなかったけど次はがんばりたい) ⑥ペアから学んだこと(自分のこと置き換えても自然でよかった (ペアから学んだこと)) ⑦感想・反省(スラスラは言えなかったので次はがんばりたい (感想))</p> <p>④ペアになった人から一言(すらすら聞かせるようにはっきり言う (ペアから学んだこと)) ⑤前週と比べて自分の成長した所(難しかったけど、質問しあうことができたのでよかった (感想))</p> <p>④ペアになった人から一言(とてもスラスラと相づちなども言えてよかったです (ペア)) ⑤前週と比べて自分の成長した所(いつもよりスラスラ言うことができた。相づちも悩まずに言うことができるようになった (感想))</p> | <p>いつも目を見てくれるし、うれしいです! (ペア) 自分のこと置き換えても自然でよかった (ペアから学んだこと) もっと相手の目を見れるようにしたいです (感想) 楽しくきれいに会話できた! Good! (ペア) はっきりと聞こえやすいように英語を言うこと (ペアから学んだこと) しっかりと英語が言えたのでよかった。次回もがんばりたい (感想) 相づちお互い言えてよかった (ペア) ほんとうに話しているみたいだった (ペアから学んだこと) 1文プラスしてもスラスラ言えた (感想) ちゃんと自分のこと置き換えていた (ペアから学んだこと) スラスラは言えなかったので次はがんばりたい (感想) すらすら聞かせるようにはっきり言う (ペアから学んだこと) 難しかったけど、質問しあうことができたのでよかった (感想) とてもスラスラと相づちなども言えてよかったです (ペア) いつもよりスラスラ言うことができた。相づちも悩まずに言うことができるようになった (感想)</p> |

教師は、その評価により、生徒の実態や成長、困りなどをいち早く把握し、授業の中で、個人への言葉かけや支援をしたり、個人やペアで良かった点や工夫した点などを、全体で紹介したりするなど次に生かすことができると考える。

iii 帯活動冊子「YOU CAN DO IT！」

「しゃべくり英会話」1回目から8回目は、テーマごとに冊子にし、2学期（9月～12月）に計4冊配布した。冊子は、生徒との合言葉、「間違えたって大丈夫！ Don't worry! and You can do it!」から「YOU CAN DO IT!」と名付けた。内容は以下のような構成になっており、それぞれ生徒が目標と振り返りをしながら、次回の帯活動「しゃべくり英会話」や次回のテーマの冊子「YOU CAN DO IT!」にそれを生かした目標に向かっていけるように工夫をした。（冊子は別紙資料）



工夫1:表紙に冊子ごとに「私の目標」を記入できる

工夫2:表紙の裏に帯活動目標設定リストを付け、帯活動の目標や内容と教科書の単元との関連や見通しなどが把握できる

工夫3:相づち1, 2「相づちを使ってみよう!」や「これ使える!」など会話を自然に続けるためのお助けシートがあり、参考にできる

工夫4:「しゃべくり英会話」1回目～8回目で段階的に話す力を付けることができる

工夫5:裏表紙は「この冊子の終わりに」とし、振り返りと次への目標設定をするページで、表紙の「私の目標」に対する反省・感想を記入させ、自分の成長した点と課題点を踏まえて、次回の冊子の「私の目標」が記入できる

iv 目標設定と振り返り（自己評価とペアからの一言）について

上記のような内容で、テーマに応じて、「YOU CAN DO IT!」を作成し、2学期に計4冊を生徒に配布して、帯活動を行った。その際、まず最初に、冊子の表紙に「私の目標」を記入させた。さらに終了後には、目標の振り返りをし、次の冊子の「私の目標」がそれを生かしたものになるように生徒に指導した。また、冊子の中の1回目～8回目の「しゃべくり英会話」にもそれぞれ段階的に目標を設定しており、それに対する自己評価とペアからの一言を毎回行った。アンケートによると「『目標』と『振り返り』を繰り返してどうでしたか」に対して以下のような回答が見られた。

- 徐々に目標を達成することができていっているのが分かった
- 自分の反省点を整理し次回の課題を見つけることが出来たので良かった
- 次に自分が気をつけること（足りないところ）が分かった
- 目標と振り返りを明らかにすることで自分の成長や課題を見つけられた
- 目標があることでそれに向かって頑張ろうという気持ちが出てきた
- 段々成長して行って、うれしかった
- 前と比べて良くなると達成感があった
- 前回やったのと比較することができて良かった
- しっかり目標に向けて頑張れた

次に、「『話すこと』において『ペアについて』感じたことを書いてください」に対しては以下のような回答があった。

- 自分のことをよく見てたんだなと思った
- ペアがいてこそそのYOU CAN DO IT!なんだなと思った
- ペアの大切さを感じました
- 相手がいるからこそこの会話なので大切にしたい
- ペアがいたから少しずつスラスラ言うことができた
- ペアの人が上手で頑張ろうと思えた
- ペアと協力して思い出そうとして出来たことで覚えることができたのでペアはとても大切だと思った
- 教えあうことで理解を深められた
- ペアからの一言がうれしかった
- 勇気が出る一言でした
- うれしいことを書いてもらおうと次も頑張ろうと思えた
- 分からないところ（大切なところ）があったら教えてくれた（わかるようになった）
- 自分では気づかない悪いところや良いところがあって良いと思った
- ペアと間違いを注意しあえたから成長できた
- ペアがいないと話せないので感謝です

以上のことから、生徒は、目標を設定し、振り返ることを繰り返すことで、自分の実態を把握でき、次にどうすべきかを意欲的に考えることができるようになると思う。

また、ペア・ワークをすることで、目標に向かって、教え合い、励まし合いながら、共に学び合う楽しさや、成長し合う喜びを共感することができると思われる。さらに、相手から学ぶことで、自分が成長できることに感謝し、お互いをさらに大切に思う心が育ちつつあると捉えた。

v 「しゃべくり英会話」8回目について

「しゃべくり英会話」の8回目の目標は「クラスの誰とでも1分間話し続けることができる」で、1回目～7回目のまとめであり、「英語を話す力」、「即興を前提とするやり取りができる力」が、誰とどのくらい発揮できるかを知る上で最も重要な活動である。生徒には、事前にテーマに合った自分の言いたい情報をそれぞれのやり方で簡単にメモをして準備をさせた。

また、誰からどんな情報を聞き取ったのか記入する欄を設けた。始めは質問が一方的であつ

たり、会話の途中で、どう言っているかわからず、練習した会話を見返したり、聞いたことをすぐに記入して会話が途切れたりと色々な課題が見つかり、その都度、生徒と改善点を話しながら行った。

回を重ねるにつれ、「二人とも目を見て言えるようになったので良かったです」「互いに相づちもできて会話らしくなってきた」「前回の即興に比べて質問の数や相づちができるようになった」「言いたいことをすぐ英語にすることが段々できてきていると思います」「1分があつという間で、まだ話したかった」など、達成感を感じている生徒が増えた。図8は第8回目の「しゃべくり英会話」の生徒の自己評価である。

(図8)

| ＜自己評価＞ | |
|---|-----------------------|
| ①相手の目を見てお互い伝え合えた? ②答える人は、1文プラスしてスラスラ言えるようになった? ③1分以内で言えるようになった? ④最後にペアになった人から一言(多分、答えてきてよかった。) | 1文増えたことで会話することが楽しくなった |
| ④最後にペアになった人から一言(笑顔で大げさな声で褒められた) ⑤感想・反省(相づちもできて、プラス1文も言えてよかった) | 相づちもプラス1文も言えてよかった |
| ⑤ペアになった人から一言(Nice talking with you.) ⑥感想・反省(やっと会話らしくなっていてよかった。) | やっと会話らしくなっていてよかった |
| ⑤ペアになった人から一言(もうなるほどスラスラいえていてカッコよかった。) ⑥感想・反省(最初よりも言えるようになったのが実感できる！) | 最初よりも言えるようになったのが実感できる |
| ⑤ペアになった人から一言(Nice talking!) ⑥感想・反省(1回目と比べると成長したと思った。) | 1回目と比べると成長したと思った |

③検証授業（帯活動「しゃべくり英会話」を始めるに当たって）

これまで述べてきた帯活動「しゃべくり英会話」を始めるに当たって、2学期の始め（9月8日、11日）全クラス対象で授業を行った。題目は、「その場で英語のやり取りができるために大事なことは何か考えよう」で、1学期末に行ったパフォーマンス・テストの振り返りや英語学習に関するアンケートの結果を示した上で行った。（学習指導案は次のページ）

生徒から出た意見は以下のようなもので、「会話表現などの予備知識」や「相づちなどのリアクション」「聞き返しや質問」「話したいこと（テーマ）の準備」「話すことに慣れる」など、「YOU

- ・「何を聞かれているのかが分かることの大切さ」
- ・「単語や文法、会話表現などの予備知識もたくさん持つておくこと」
- ・「相づちやジェスチャーなどのリアクションをつけること」
- ・「聞き返ししたり、自分から質問したりすることも必要」
- ・「話したいこと(話題やテーマ)の準備をしておくべき」
- ・「話すことに慣れる」
- ・「緊張しない度胸をつけたい」

CAN DO IT! (しゃべくり英会話)」を帯活動で行う意義や価値を確認することができた。その後、早速「しゃべくり英会話1回目」を実施し、この日から、「即興を前提とするやり取りができる力を付けるための「話すこと」[やり取り]の帯活動がスタートした。

英語科学習指導案

- 1, 題目 その場で英語のやり取りができるために大事なことは何か考えよう
- 2, 目標 ALT との 1 分間での会話（パフォーマンス・テスト）を振り返り、英語で会話のやり取りを続けるためには、どのようなことが大切かを学ぶ
- 3, 本時案

| 分 | 学習活動 | 指導上の留意点 | 評価の観点 |
|--|---|--|--------------------------------|
| 5 | 1, 英語であいさつ Warm-up(1分チャット) | ◎「夏休みに何をしたか」についてペアと1分間の会話をさせる | |
| 20 | 2, パフォーマンス・テストの振り返りをし、会話を続けるために何が大事かを考える ○映像を見る（モデルとして） | ◎1学期の終わりに実施したパフォーマンス・テストの振り返りをさせ、英語で会話のやり取りを続けるために大事なことはどんなことを考え発表させる | ・映像や資料により振り返りができ、自分の意見・考えが言える |
| <p>その場で英語のやり取りができるために大事なことは何だろう？</p> | | | |
| | ○「話す力」の評価について知る ○アンケート結果(実態)から課題などを 知り、クラスや個人の目標を考える | ◎アイコンタクトや相づち・つなぎ言葉・聞き返し のなど会話のルールの大切さを学ばせる ◎流暢さ（語彙数）について学ばせる ◎ペア（相手）との協力・理解しあうことの大 きさをおさえる ◎2学期の目標を考えたり、今後の自分の理想像を イメージさせる | |
| 15 | 3, 帯活動の目標設定リストを確認し、 ペアで1分間会話を練習する ○しゃべくり英会話（1テーマ、8回シリーズ）のやり方を知る ○ペアを作り、1回目をやってみる | ◎2学期の帯活動の目標と予定を知らせる ◎しゃべくり英会話の目的・内容・手順の説明をし、 実際やらせる（第1回目） | ・活動の目的や内容をしっかり把握して ペアで練習できる |
| <p>習った英語を使って、目標を目指して、ペア（話す相手）と協力し、 お互い伝え合い、分かり合うことが大切であることを学べた</p> | | | |
| 5 | 4, 振り返りをする | ◎ペアごとにシートに評価をさせる | |
| 5 | 5, 次時の予告 ○個人の目標を表紙に書いてくる | | |

④抽出生徒の調査

i 抽出にあたって

研究にあたり、実態を把握した上で、抽出生徒を選び、帯活動の様子や自己評価の記録、パフォーマンス・テスト、アンケートなどを分析することにより、それぞれがどのように変容するかを調査していくことにした。抽出生徒においては、「話すこと」に対する抵抗や苦手意識を取り除き、「英語が使えた（言いたいことが言えた）！」「話すことで、相手と分かり合えた！」と感じる場面や感想が見られるようにしたいという思いから、以下の視点で4名選出した。

| | |
|-----|---|
| 視点Ⅰ | 「話すこと」が一番苦手が一番（または一番ではないが）好きではない生徒 |
| 視点Ⅱ | 「話すこと」が一番付けたい力である生徒（必要性・将来性・理想・夢を抱いている） |
| 視点Ⅲ | 第1回パフォーマンス・テストの点がA:9~7点、B:6~4点、C:3~0点の3レベルから各1~2名の生徒（積極性と流暢さの点の変化に特に注目する） |
| 視点Ⅳ | 撮影がOKの生徒 |

生徒 A

英語を「話すこと」は好きではなく、一番苦手である。細かいことを気にしてしまい緊張して話すことに抵抗を感じている。しかし英語学習に意欲的で向上心を持っている。

- 苦手な理由:「細かいことを気にしすぎてスムーズに話せない。緊張して言葉が出てこない」
- 一番付けたい理由:「緊張したとしても笑顔で会話できるようにしたい」
- 第1回パフォーマンス・テストはA（9点:積極性のみ-1点, ALTへの質問が1回）

生徒 B1

英語を「話すこと」が一番好きであるが、一番苦手である。細かいこと（文法）を気にしすぎるが、英語学習に常に意欲的である。

- 苦手な理由:「楽しいけど、自分の言いたいことを伝えるのは難しいから」
- 一番付けたい理由:「他のは、ある程度できるけど、話すのはあまりできないから」
- 筆記テストは高得点だが、第1回パフォーマンス・テストB（6点:積極性と流暢さ各1点, 正確さ満点）

生徒 B2

英語を「話すこと」は1番好きではなく、一番苦手である。しかし、一番付けたい力であるとも思っている。英語学習に対する意欲は普通である。

- 苦手な理由:「自分で文を考えながら文法などにも気を付けないといけないから」
- 一番付けたい理由:「苦手なので。社会に出たとき大切」
- 第1回パフォーマンス・テストはB（6点:積極性2点, 正確さ満点, 流暢さ0点）

生徒 C

英語を「話すこと」は一番好きではなく、一番苦手である。しかし、一番付けたい力であるとも思っている。英語学習に対しては意欲的であるがかなり困難を感じている。

- 苦手な理由:「言葉がすぐに出てこないから」
- 一番付けたい理由:「会話が続かないから」
- パフォーマンス・テストはC（3点:積極性, 流暢さ0点）

ii 抽出生徒の帯活動における目標設定と自己評価

帯活動でテーマによって冊子「YOU CAN DO IT!」を配布し、活動を始めるに当たり、表紙に「私の目標」を書かせた。抽出生徒の目標が、1冊目から2、3冊目にどのようなようになったかを見てみると以下のものであった。

YOU CAN DO IT! 表紙「私の目標」(I 1冊目→II 2冊目→III 3冊目)

| | |
|-------|--|
| 生徒 A | 細かいことを気にしすぎて話せないよりもとりあえず伝えようと努力する →II 相づちも使いながら会話をつなげようと努力する。相手の目をしっかり見るようにする →III ただ読むだけではなく実際に話すように伝わるようにする |
| 生徒 B1 | ずっと話を続けられるようになる →II 相づち、プラス1文ができるようになる →III 質問や相づちのレポトリーを増やす |
| 生徒 B2 | 2学期のパフォーマンス・テストで8割以上取れるように頑張る →II 1分以内で言えるようになる →III 即興で相づちが使えたり文を考えたりできるようになる |
| 生徒 C | 話す、聞く力を身につけて3年生になる前に1人前に英語で会話できるようにする →II 3年生になるまでに話す力、聞く力を身につけ、英会話を1人前にできるようにする →III 英語を言い間違えず、スラスラははっきりと会話ができる |

生徒 B1 を見てみると、1冊目の「私の目標」が「ずっと話を続けられるようになる」のような「話すこと」の漠然とした目標や理想であったのに対して、2冊目になると、「相づち、プラス1文ができるようになる」、さらに3冊目には「質問や相づちのレポトリーを増やす」といった自分の課題を把握した上で、目標が具体的または、少しずつ進化していると考えられる。

また、「しゃべくり英会話」8回目の自己評価を見てみると以下のものであった。

「しゃべくり英会話」8回目自己評価 (II 2冊目→III 3冊目)

| | |
|-------|---|
| 生徒 A | まだ考えていることをすぐに英語にすることができないので自然な会話をしたいです。笑顔を作ることはできました。相づちもだいぶ慣れました。 →III 考えていることをすぐに英語にすることが段々できたと思います。 |
| 生徒 B1 | 4つぐらい質問をすることができたけど相づちはI see.しか出てこなかった。 →III 前回即興でした時よりも相づちも質問も自然にできた。 |
| 生徒 B2 | 言っていることを聞いて、質問したりできた。 →III だいぶん文を考えて言うのができるようになった。 |
| 生徒 C | 難しかったけど質問しあうことができたのでよかった。 →III 心配だったけど英語をきちんと覚えてよかったです。 |

先ほど述べた生徒 B1 を引き続き見てみると、「私の目標」を意識し、2冊目の自己評価では「4つぐらい質問をすることができたけれど、相づちはI see.しか出てこなかった」であったが、3冊目では、「前回即興でした時よりも相づちも質問も自然にできた」とある。このように、回を重ねるにつれ、目標に対して自分が少しずつできるようになっていることを実感していることが伺える。

以上のことから、どんなレベルの生徒も、自分のできていることと、できていないことの実態把握をし、それに基づいて具体的な目標を立て、それを振り返ることで、次の新たな目標を少しずつ発展させて立てることができていくと考えられる。そうすることで、自分のレベルが上がっていく有能感や自信につながるのではないかと考える。

iii 抽出生徒のパフォーマンス・テストと英語学習に関するアンケートの結果分析

抽出生徒の第1回、第2回パフォーマンス・テストの点の比較と、その具体的な内容は以下の

通り（表4）であった。

（表4） 抽出生徒のパフォーマンス・テストの点と様子の比較

| | | 積極性 (4点) | 正確さ (4点) | 流暢さ(語数) (2点) | 合計点 (10点) | 備 考 (1回目との主な変容) |
|-------|----|-------------|-------------|-----------------|--------------|--|
| 生徒 A | 1回 | 3 ↓ | 4 | 2 (43wpm) ↓ | 9 | 積極性: ALT への質問が 1 問から 2 問へ増えた |
| | 2回 | 4 | 4 | 2 (54wpm) | 10 | 流暢さ: 語数が 11 語増えた |
| 生徒 B1 | 1回 | 1 ↓ | 4 | 1 (30wpm) ↓ | 6 | 積極性: アイコンタクトのみが ALT への質問 2 問, 相づちもでき、満点に |
| | 2回 | 4 | 4 | 2 (46wpm) | 10 | 流暢さ: 語数が 16 語増えた |
| 生徒 B2 | 1回 | 2 ↓ | 4 | 0 (22wpm) ↓ | 6 | 積極性: 前回と同じで ALT への質問無し。極度の緊張 |
| | 2回 | 2 | 2 | 0 (24wpm) | 4 | で悔しそうだった 流暢さ: 語数が 2 語増えた |
| 生徒 C | 1回 | 0 ↓ | 4 | 0 (9wpm) ↓ | 3 | 積極性: アイコンタクトできた。"Pardon?"と聞いた後、 |
| | 2回 | 1 ↓ | 2 | 0 (26wpm) ↓ | 3 | 理解し答えた。 流暢さ: 語数が 3 倍に増加した |

表4から、抽出生徒のパフォーマンス・テストの点とその様子を見てみると、特に生徒 B1 の成長は著しく、積極性、流暢さともに伸び、正確さも完璧であった。また、合計点は変わらなかったものの、生徒 C は、ALT の顔をしっかりと見て、聞き取れなかった質問を英語で聞き返し、理解した上で答えることができた。流暢さにおいても、語数が3倍に増え、「話すこと」に積極的な姿が見られた。

また、第2回パフォーマンス・テスト後に行ったアンケートでは、「ALT が言っていることや ALT の質問に答えることができたか」の質問に、4人全員が「よく分かった (できた)」「半分以上分かった (できた)」と答え、「相づちやジェスチャーなど会話を続けようとする努力は」の質問には4人全員が「よく (まあまあ) できた」と答えている。さらに、「前回と比べて良かった (成長した) と思うか」の質問に、4人全員が「大変良かった」と答えていた。具体的な質問については、以下のような回答であった。

<生徒 A>

| | |
|---|---|
| 1, 第1回パフォーマンス・テストより良かった (成長した) ところは何? | 相づちを打ったり, うなずいたりできた。聞き返すことができたし自然な感じに少しでもなれたと思います。 |
| 2, 「話すこと」において「ペアについて」感じたことは? | 自分が真剣に話していることをうなずき, 相づちをして聞いてくれてうれしかった。ペアと話すとき本当の会話をしているような感じだった。ペアからの一言も次につながる一言だった。 |
| 3, YOU CAN DO IT!で「目標」「振り返り」を繰り返してみてもうどうだったか? | 目標を立てたことで自分に足りないことを見つけられた。 |
| 4, YOU CAN DO IT!をやってみての感想 | 2 回目しゃべくり英会話でもっと完璧に覚えたかった。相づちがいっぱいのついでに少しずつ使うことができた。 |
| 5, 「しゃべくり英会話」の一番好きな活動とその理由 | |
| 4 回 目 | 自分の目標である日本語から英語をスラスラ変えられるが一番できるから |

<生徒 B1 >

| | |
|--|--|
| 1, 第1回パフォーマンス・テストより良かった（成長した）ところは？ | |
| 相づちも質問も、プラス1文もできたところ | |
| 2, 「話すこと」において「ペアについて」感じたことは？ | |
| ペアがいてこそその YOU CAN DO IT!なんだなと思った。ペアからの一言がうれしかった。 | |
| 3, YOU CAN DO IT!で「目標」「振り返り」を繰り返してみてもうどうだったか？ | |
| 目標があることでそれに向かって頑張ろうという気持ちができた。 | |
| 4, YOU CAN DO IT!をやってみての感想 | |
| YOU CAN DO IT!をやっていると自然にプラス1文ができるようになっていたり相づちが使えていたりして会話がはずむ方法が身に付いていた。日に日に会話らしくなっていくのも YOU CAN DO IT!のおかげだと思う。。 | |
| 5, 「しゃべくり英会話」の一番好きな活動とその理由 | |
| 8 回 目 | 会話が弾むのが楽しかったし自分が少しずつ話せるようになっていっていることが分かるから |

<生徒 B2 >

| | |
|---|-------------|
| 1, 第1回パフォーマンス・テストより良かった（成長した）ところは？ | |
| 少しは会話を続けられるようになった。 | |
| 2, 「話すこと」において「ペアについて」感じたことは？ | |
| ペアからの一言で自分の直す点がわかった。。 | |
| 3, YOU CAN DO IT!で「目標」「振り返り」を繰り返してみてもうどうだったか？ | |
| 目標を立てたことで少しずつ英語がしゃべれるようになっていくのを感じた。。 | |
| 4, YOU CAN DO IT!をやってみての感想 | |
| 楽しかった。 | |
| 5, 「しゃべくり英会話」の一番好きな活動とその理由 | |
| 5 回 目 | 自分のことが言えるから |

<生徒 C>

| | |
|---|----------------------|
| 1, 第1回パフォーマンス・テストより良かった（成長した）ところは？ | |
| ALT とちゃんと会話ができる。質問の意味を理解して答えることができた。 | |
| 2, 「話すこと」において「ペアについて」感じたことは？ | |
| 会話などのことで的確なアドバイスをしてくれてよかったです。 | |
| 3, YOU CAN DO IT!で「目標」「振り返り」を繰り返してみてもうどうだったか？ | |
| 1番最初の時よりもだんだん上手に会話ができるようになったのを感じた。 | |
| 4, YOU CAN DO IT!をやってみての感想 | |
| もう少し、しっかり取り組んでいたらもっといい会話ができたとと思う。次も頑張りたい。 | |
| 5, 「しゃべくり英会話」の一番好きな活動とその理由 | |
| 6 回 目 | 相づちを打ちながら話すのが楽しかったから |

このように、2学期の間、抽出生徒の帯活動での様子や、「私の目標」「自己評価」などの記録、パフォーマンス・テストや英語学習に関するアンケート結果などを調査する中で以下のことが分かった。

- ・英語のレベルに関わらず、「話すこと」やり取り中心の帯活動で、ペア・ワークを活用することで、「本当の会話をしている感じだった」や「ペアからの一言がうれしかった」「的確にアドバイスをしてくれた」など、生徒のやる気、意欲を向上させるのに有効である。
- ・「話すこと」やり取り中心の帯活動(Q&A,インタビュー活動,相づちや決まり文句練習など)は、実際の会話において、「積極性」「流暢さ(語数)」に効果がある。
- ・目標設定や振り返りを繰り返すことで、自分のできたところと今後の課題が見え、少しずつ具体的または進化した(レベルアップした)目標を立てることができるようになる。
- ・目標を達成する喜びや自分が以前よりも成長してきていることを感じ始めると、短期間でもかなりの効果が見られる。

⑤事後調査(2年生全体)

i 第2回パフォーマンス・テストの結果分析

2学期始めの検証授業をスタートに、毎時間、短時間の帯活動を行い、2学期の期末テスト後に、第1回パフォーマンス・テストと同様の方法で、第2回パフォーマンス・テストを行った。検証授業で帯活動の目標設定リストを見ながら、パフォーマンス・テストの時期や内容、評価について生徒と確認は行ったが、再度、事前にプリントを準備し説明を行った。

結果について、第1回パフォーマンス・テストと合計点(図9)、積極性(図10)正確さ(図11)、流暢さ(図12)をそれぞれグラフにして比較してみた。また、表5は、クラス別と全体の平均点を第1回と第2回のパフォーマンス・テストで比較したものである。

(表5)

第1回・第2回パフォーマンステスト平均点の比較(クラスと全体)

| クラス 項目 | 2-W | 2-X | 2-Y | 2-Z | 2年全体 (128名) |
|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|
| 積極性 (4点満点) | 2.0点 →1.5点 | 1.6点 →1.4点 | 0.9点 →2.2点 | 1.4点 →1.6点 | 1.5点 →1.7点 |
| 正確さ (4点満点) | 3.0点 →2.6点 | 2.8点 →2.1点 | 2.8点 →2.5点 | 3.0点 →2.6点 | 2.9点 →2.4点 |
| 流暢さ (2点満点) | 0.2点 →1.0点 | 0.3点 →0.8点 | 0.2点 →1.0点 | 0.3点 →1.2点 | 0.2点 →0.9点 |
| 合計点 (10点満点) | 5.3点 →5.2点 | 4.7点 →4.4点 | 3.8点 →5.6点 | 4.6点 →5.4点 | 4.6点 →5.1点 |
| 最高点と その人数 | 9点1名 10点1名 | 7点7名 10点1名 | 7点1名 10点2名 | 8点1名 9点4名 | 9点1名 10点4名 |

表5から、平均点では、積極性は4クラス中、2クラスは第2回パフォーマンス・テストの方が伸びており、2年生全体では、+0.2点であった。流暢さは、どのクラスも+0.5点~+0.9点で、かなり伸びが見られた。正確さにおいて、流暢さに伴い、単語や文の量が増えたことや文法的な間違いなどから、どのクラスも-0.3~-0.4点であった。最高点は、第1回が9点で1名であったが、第2回は満点が4名であった。また、第1回で積極性、正確さ、流暢さ、合計点全てが最下位だったクラスが最も伸び、最上位になっていた。

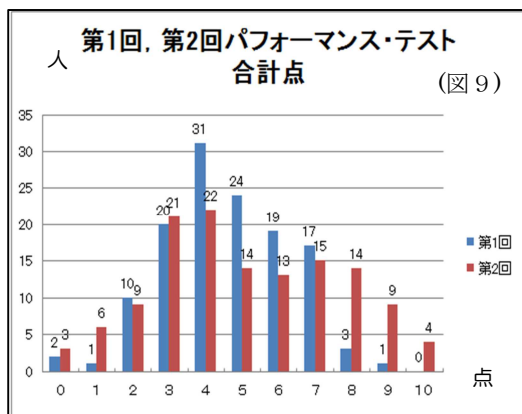
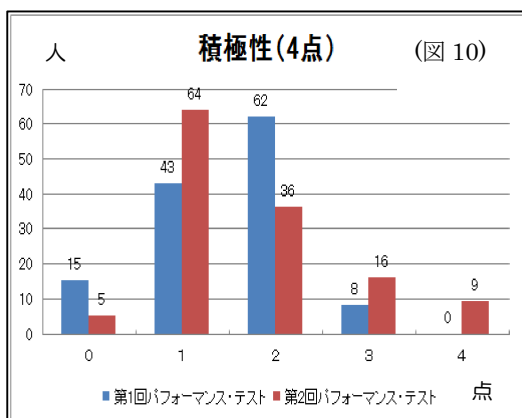
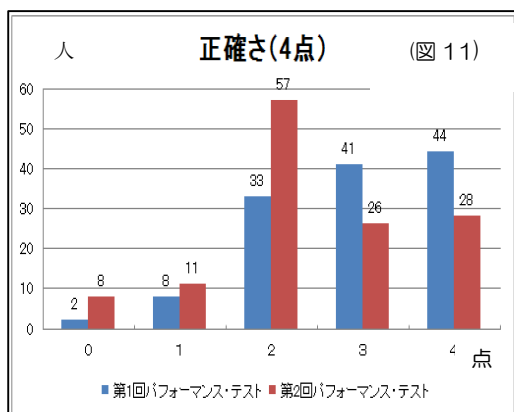


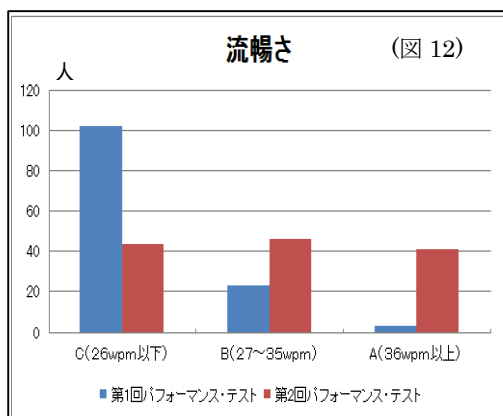
図9は、第1回、第2回パフォーマンス・テストの合計点を比較したグラフである。8点～10点の上位層の生徒が増えたことが分かる。しかし、下位層の点をいかに伸ばしていくかが今後の課題である。これらの結果を評価項目と具体的な評価の判断基準から分析してみると、以下ようになった。



○積極性：全体では+0.2点だが、クラスによって下がったところもある。具体的に、ALTへの質問を2回以上した生徒は、(第1回：0名→第2回：10名)、1回した生徒は(第1回：11名→第2回：23名)といずれも増えた。アイコンタクトもほぼ全員できるようになった。しかし、積極性の点が下がっている原因として、ALTへの質問に答えるのに全力で、なかなかALTへの質問や相づちのチャンスやタイミングを上手く持つことができなかった生徒が多かったことが分かった。



○正確さ：全体では-0.5点であった。具体的に見てみると、文法や語彙に間違いがないA評価は(第1回：68名→第2回：40名)、質問と応答の整合性があつたA評価は(第1回：61名→第2回：42名)と減少した。下がった原因として、第1回と比べると、テーマが2つあり、過去形と未来形を使い分けなければならないという文法的レベルの問題が大きく影響している。また、流暢さ(語数)が増えたことで、間違いも増えたと考えられる。



○流暢さ：全てのクラスで平均点が上がり、全体では+0.7点であった。

具体的に、1分間の語数(wpm)が26wpm以下であるC評価は(第1回：102名→43名)、36wpm以上のA評価は(第1回：3名→41名)で最高語数は54wpmの生徒であった。

第2回で10点満点となった4名の生徒の語数を第1回と比較して見てみると、

(43wpm→54wpm) (27wpm→44wpm) (30wpm→46wpm) (27wpm→41wpm) で、中には、語数がかなり増えた生徒が見られた。さらに、第1回から第2回の語数が増えた生徒は全体で81名で、内CからAに2段階アップした生徒は24名であった。

以上のパフォーマンス・テストの得点と生徒の様子を観察してみて、成果と課題をまとめると以下のように考えられる。

<成果>

- ・流暢さ（語数）はどのクラスも平均点が上がり、全体的にかなり上がった。
- ・アイコンタクトがほぼ全員できるようになった。
- ・10点満点の生徒がいた。
- ・意欲的にある程度準備をしてきている生徒が見られた。
- ・話すことに少しずつ抵抗や緊張が減ったように感じる。
- ・身振り、手振りをしながら会話したり、表情が和らいだりする生徒が増えた。
- ・アンケートで「英語を話すことが一番好きではなく苦手であるが、一番付きたい力である」生徒が多かったクラスで、第1回パフォーマンス・テストでは最下位だったが、第2回で積極性・流暢さでかなり成長しており、合計点が最下位から最上位になった。

<課題>

- ・パフォーマンス・テストの点が低かった生徒の指導をどのようにしていくか。
- ・正確さが下がったことから、自分が言ったことの間違いを振り返る機会が必要である。
- ・ALTへの質問ができなかったので相づちが使えなかった。
- ・ALTが変わったため、若干評価に差があることから、評価の客観性が必要である。

ii 第2回英語学習に関するアンケートの結果分析

a パフォーマンス・テストについて

まず、第2回パフォーマンス・テストに関する問いについての回答を集計したところ、以下のような結果になった。(表6)

(表6) パフォーマンス・テストに関する回答集計(2年生128名)

| 質問内容 | 回 答 | 人 数 | | 割 合 | |
|---------------------|-------------------|-----|-----|-----|-----|
| | | 1回目 | 2回目 | 1回目 | 2回目 |
| (1)ALTが言っていることが | よく(半分以上)分かった | 78 | 113 | 61% | 88% |
| | 少ししか(ほとんど)分からなかった | 50 | 15 | 39% | 12% |
| (2)ALTの質問に答えることが | よく(半分以上)できた | 80 | 110 | 62% | 86% |
| | 少ししか(ほとんど)できなかった | 48 | 18 | 38% | 14% |
| (3)相づちなど会話を続ける努力は | よく(まあまあ)できた | 54 | 78 | 42% | 61% |
| | 少ししか(全く)できなかった | 74 | 50 | 58% | 39% |
| (4)パフォーマンス・テストの出来は | よく(まあまあ)できた | 66 | 107 | 52% | 84% |
| | あまり(全く)できなかった | 62 | 21 | 48% | 16% |
| (5)1回目と比べて良かった、成長した | (大変)良かった | | 113 | | 88% |
| | あまり(全く)変化無し | | 15 | | 12% |

特に第1回と比較してみると、ALTの言っていることが「よく(半分以上)分かった」が128名中、76名から110名、ALTの質問に答えることが「よく(半分以上)できた」が78名から

110名となり、86%の生徒が「よく（半分以上）」の達成感を感じていることが分かった。また、第1回と比べて良かった（成長した）と感じた生徒は、「(大変)良かった」は、113名で88%の生徒がパフォーマンス・テストにおいて、自分自身の英語を話す力の成長を感じていた。(表6)

さらに、「どんなところが良かったと思いますか」の問いに対して、以下のように、「前回できなかった質問が自分からできた」など英語を話すことに少しずつ自信を感じているのが伺える。

| |
|---|
| ○前回できなかった質問が、自分から質問できた (7人) |
| ○前はあまりしゃべれなかったけど今回は全て答えることが出来た(4人) |
| ○あまり間を空けずに答えられた(会話が切れなかった)とても楽しく話すことが出来た(4人) |
| ○自分の思っていることをちゃんと言えた。前より会話が増えたと思う (4人) |
| ○前よりスラスラ言えて(とどろろ話せて)、言っている意味がほとんど分かった (4人) |
| ○質問を聞き取り(理解して) 答えを(多く) 返せた (2人) ○相づちをすることが出来た(2人) |
| ○ALTの言っていることが前よりよく分かった(聞き取れるようになった) |
| ○1文プラスが出来たので良かった |
| ○How about you? を使えた |
| ○相づちも質問もプラス1文も出来た |
| ○分からないときに黙らずに聞き返すことが出来た |

また、「あまり(全く)変わらなかった」を選んだ生徒の理由やどんなところを改善していきたいか」の回答として、「沈黙があった」「詰まらずにスラスラ言いたい」「よく聞き取るように頑張る」「単語をもっと覚えて言えるようにしたい」「相づちとかももうちょっと入れられるようにしたい」などであった。

b 「YOU CAN DO IT! (しゃべくり英会話)」について

YOU CAN DO IT!の「しゃべくり英会話」で「1回目～8回目までのどの回が一番好き、一番苦手だったか」の問いに対しての回答をまとめると以下のようになった。(表7)

(表7) 「しゃべくり英会話」好きな活動・苦手な活動

| 活動目標 | クラス | | 2-W | | 2-X | | 2-Y | | 2-Z | | 合計 | |
|----------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-------|----|
| | 好き | 苦手 | 好き | 苦手 | 好き | 苦手 | 好き | 苦手 | 好き | 苦手 | 好き | 苦手 |
| 第1回シートを見て | 8 | 0 | 1 2 | 1 | 4 | 0 | 1 2 | 0 | 3 6 | 1 | | |
| 第2回答える人はシート見ない | 2 | 9 | 1 | 1 1 | 5 | 1 1 | 2 | 9 | 1 0 | 4 0 | | |
| 第3回バラバラ質問 | 1 | 5 | 1 | 2 | 0 | 1 | 0 | 3 | 2 | 1 0 | | |
| 第4回日本語から英語が | 5 | 3 | 3 | 4 | 1 | 8 | 2 | 8 | 1 1 | 2 3 | | |
| 第5回自分のことに置き換えて | 6 | 0 | 6 | 1 | 6 | 0 | 1 3 | 0 | 3 1 | 1 | | |
| 第6回相づちを打って | 4 | 2 | 4 | 2 | 2 | 4 | 0 | 5 | 1 0 | 1 3 | | |
| 第7回1文プラスして | 2 | 1 | 0 | 1 | 2 | 3 | 1 | 3 | 5 | 8 | | |
| 第8回即興で誰とでも | 4 | 1 2 | 5 | 1 0 | 1 1 | 4 | 3 | 5 | 2 3 | 3 1 | | |
| 集計人数 | | | 3 2 | | 3 2 | | 3 1 | | 3 3 | | 1 2 8 | |

具体的に、その主な理由を挙げてみると、1回目「シートを見てペアでスラスラ言える」が好きな理由が「覚える必要がなくて言いやすい（簡単）」、2回目「答える人はシートを見ないでペアでスラスラ言える」が苦手な理由が、覚えるのが難しい（大変）であったのに対して、5回目、8回目に注目すると以下ようになった。

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・第5回目「答えを自分のことに置き換えてペアでスラスラ言える」が好きな主な理由 →自分のことなので実感があり会話が楽しかった ・第8回目「即興で誰とでもテーマについて会話を続けることができる」が好きな主な理由 →いろんな人と会話が弾むと楽しい。少しずつ話せるようになっていくことがわかるとうれしい ・第8回目「即興で誰とでもテーマについて会話を続けることができる」が苦手な主な理由 →即興は難しい（言いたいことがすぐに英語にできない。やはり沈黙がある。） |
|---|

以上の結果をさらにクラスごとに見てみると、他の活動が、「簡単」や「難しい」を理由に多かったり、少なかったりする傾向にあるのに対して、8回目「即興で誰とでも会話を続けること」では、「いろんな人と会話できて楽しい」「わかり合えるとうれしい」と感じている生徒が多いクラスと、「沈黙があった」「緊張した」など、まだ少し抵抗を感じている生徒が何人か見られるクラスがあった。また、5回目「答えを自分のことに置き換えてペアでスラスラ言える」では、「自分のことが伝えられるとうれしい」と感じる生徒が多いクラスなど、クラスによって活動の取組に以下のような傾向（違い）があるように感じた。

| | |
|-----|--|
| 2-W | の傾向：第8回目「即興で誰とでも会話を続けること」に苦手意識を感じている生徒が多く、特に沈黙が続いたことを反省している |
| 2-X | の傾向：第8回目「即興で誰とでも会話を続けること」が難しいと感じている生徒が多い |
| 2-Y | の傾向：第8回目「即興で誰とでも会話を続けること」でいろんな人と会話できたり、会話を続ける（会話が弾む）ことの楽しさや、少しずつ話せるようになっていくことを実感し始めている生徒が比較的多い |
| 2-Z | の傾向：第8回目「即興で誰とでも会話を続けること」が好きな生徒は少ないが、「自分のことに置き換えて話すこと」が好きな生徒が多く、自分のことをしっかり伝え合うことができた喜びやそのことで会話が弾んだ楽しさを感じる生徒が多い |

以上のことから、「即興を前提とするやり取りができる力」を育むためには、「自分のことを伝え合う喜びを体験できる活動を、帯活動で繰り返し、継続してもつこと」が大変有効であり、それが実感できた生徒やクラスに効果が表れたことが分かった。

⑥考察

以上の研究の実際の結果をまとめると、以下のことが考えられる。

- ・「即興を前提とするやり取りができる力」を付けるため「話すこと（やり取り）」中心の帯活動を授業に位置付け、系統的、継続的に行った結果、生徒は話す力のテスト、パフォーマンス・テストで「積極性」と「流暢さ」を増し、話す力が高まっている。
- ・「話すこと」の帯活動で、例文ではなく自分についてなど、事実に基づいた実践的な会話に意欲と楽しさを感じる生徒が比較的多い。
- ・「即興を前提とするやり取り」ができ始めることを実感すると、大きな有能感と喜び、楽し

さを感じることができる。

(難しいことができるようになったときの達成感・有能感が自信になる)

- ・クラスの傾向や雰囲気(人間関係)、安心できる仲間存在は、意欲に大きな影響がある。
- ・「話すこと」[やり取り]において、ペア・ワークがとても大事(必須)である。
- ・自分が言いたいことが伝わり、理解し合えたとき、お互いが協同でできたこと(成長)を喜び合うことができ、互いの存在に感謝し、相手を大切にしようと思いやる心ができる。

7. 研究の成果と課題

(1) 成果

本研究では、「即興を前提とするやり取りができる力を育む」ための英語授業の工夫として、「目標設定リスト」に基づいた「話すこと」中心の帯活動「しゃべくり英会話」を「YOU CAN DO IT!」という冊子にして行った。この中で、「Q&A、インタビュー活動、相づちや会話表現に必要な決まり文句練習」を「ペア・ワーク」で実施した。また、実施に当たり、「目標」を立てさせ、その「振り返り」を繰り返し行った。そのことで、実践的な知識や技能の習得ができ、コミュニケーションの素晴らしさを感じ、相手を思いやる心が育った。そして、目標を達成する喜びや、互いの成長を共に実感することができた。その結果、「即興を前提とするやり取りができる力を育む」ために必要な「積極性」と「流暢さ」を増すことができた。

つまり、目標設定リストに基づいた系統的な帯活動は、生徒から英語を「話すこと」の抵抗感を減らし、日常的な話題について、事実や考え、気持ちを簡単な語句や文を用いて即興で伝えたり、質問に答えてやり取りする力を育てるのに有効であることが分かった。

(2) 課題と今後の見通し

課題としては、「即興を前提とするやり取りができる力を育む英語授業の工夫」において以下のことが挙げられ、今後さらに検討していきたい。

- ・帯活動やパフォーマンス・テストにおける支援やフィードバックの在り方を工夫し、改善する。
帯活動：活動中・活動後のアドバイスや良かったペアなどの紹介、自己評価へのコメント、定期テスト表現問題として出題(本校2年生2学期中間テストで実施)など
パフォーマンス・テスト：「正確さ」における文法や表現、質問と応答の整合性の振り返りとして評価の公開、ビデオ撮影や録音、書き取りや評価に基づいた指導点数の低い生徒への支援や補充方法の工夫など
- ・パフォーマンス・テストの評価方法や評価の客観性について検討し、改善する。
生徒の実態、テストの目的・目標に応じた評価項目や評価基準を検討して行うことや、ALTとの綿密な打ち合わせが必要である。

8. まとめ

小学校の外国語活動で、英語の音に慣れ親しんできた生徒が、中学校で「英語を話すこと」に必要性や将来性を強く感じるものの、苦手意識をもっている実態を目の当たりにし、もっと英語

を話すことに自信をもたせたいと考え、本研究をスタートさせた。

本研究では、中学校2年生の英語科の「話すこと」[やり取り]において、「即興を前提とするやり取りができる力を育む英語授業の工夫」の在り方を探ってきた。その結果、「目標設定リスト」に基づいた系統的な「帯活動」を「ペア・ワーク」を活用して繰り返し行うことが有効であることが分かった。帯活動が「授業始めの雰囲気作りやウォーミングアップの役割に過ぎない」という固定観念をまず変革し、帯活動を目標設定や内容、評価方法を工夫することで、生徒が学んだ「知識や技能」を仲間と自信を持って共有できる貴重な時間となることが分かった。そのことが、「主体的・対話的で深い学び」となり、「もっと英語でいろいろな人と話して、分かり合いたい」という「学びに向かう力」や相手を大切に思いやる心を育てることにつながるのではないかと考える。

本研究を通して、昨年担当した生徒が、仲間と協力し、失敗を恐れずに楽しそうに英語で伝え合おうとしている姿に成長を感じると共に、本研究のやりがいを感じた。今後もこの研究を授業に生かし、生徒と共に学び、成長できる教師であり続けたい。大分市教育センター長期研修という貴重な1年間をいただき、指導主事をはじめ多くの方々のご指導やご助言をいただいた。また、大分市立植田中学校のご協力のもと検証授業、長期にわたる帯活動を行うことができた。心からお礼申し上げたい。本研究の成果の還元方法としては、所属校における実践及び、大分市教職員研修などにおいて還元させていただきたい。また、今後も学んだことを生かし、大分市の教育に還元できるよう、研鑽を積んでいきたい。

9. 引用文献・参考文献

- 生徒の英語力向上推進プラン 平成27年6月5日 文部科学省
- 大分県英語教育改善推進プラン 平成28年3月10日 大分県教育委員会
- 平成28年度大分市学力向上アクションプラン 大分市教育委員会
- 平成27年度大分市標準学力調査
- 平成28年度大分県学力定着状況調査
- 平成27年度英語力調査の速報(概要)
- 中高の英語指導に関する実態調査2015 ベネッセ教育総合研究所
- 中学校新学習指導要領 平成29年3月公示
- 今後の英語教育の改善・充実方策について
報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言 文部科学省
- 中・高等学校英語科における「話す力」を高めるための指導の在り方に関する研究
平成27年度(第59回)岩手県教育研究発表会資料
- 平木 裕 「学習指導要領改訂に向けての準備 To Do リスト」英語教育(2016)
「中学校外国語における指導の充実」中等教育資料(2016)
- 津田雅子 「中学校から高校へ～書いて発表するスピーチから即興で行うスピーチへ～
三省堂 英語教科書・教材 英語教育リレーコラム(2011)
- 松沢伸二 「帯活動～その正体と魅力～」英語教育(2014)

- 小泉利恵 「スピーキングテストにおける実用性向上のための試み」(2002)
- 中村優治 「二つのパフォーマンステストの果たす役割」(2005)
- 佐藤一嘉 「英語授業も生徒も激変するパフォーマンス・テストを取り入れよう」(2014)
「授業を変えるパフォーマンス・テスト(中学1～3年)」
- 平成24年度教育課程講習会での発表資料
～言語活動を充実させた授業展開及びパフォーマンス・テスト 授業改善委員会
- 松浦伸和 「中学校学習指導要領実施上の課題とその改善(外国語)」中等教育資料(2016)
- 君塚淳一・西尾直美・田中智子「小学校英語による課題を考える」茨城大学教育実践研究29
- 柴原智幸 「攻略!英語リスニング」NHKラジオ講座(2011)
- 世界大百科事典
- 「中学生のためのすらすら英会話100」 瀧沢広人著 明治図書
- 「英語授業を変える パフォーマンス・テスト」 佐藤一嘉編著 明治図書